

言葉の力 絵の力

由比和子

昨年、シヨパンコンクールで二位に輝いたピアニストの反田^{そりた}恭平氏のドキユメンタリーが放映されていたが、その中で反田氏がシヨパンに関する書物数冊を手にして、表現力を高めるために読んできたと話していた。

ピアニストは、唯ひたすら楽譜を前に練習するのみとばかり思っていたので、自分の浅はかさを恥じ入ったものである。

なるほど、シヨパンの考えや生い立ち等を知るとは、音に深みが増し、聴く者により深い感銘をもたらすことにつながるのだろうか。

また、以前ゴッホの絵を観た時、耳を切つて包帯を巻いた自画像に、彼はどんな生活を送ったのだろうかと、彼に関する本を読んだことがあった。弟テオへの手紙から、ゴーギャンとの同居、テオからの仕送りによる苦し

い画業生活だったことがわかり、またいつまでも画壇から認められないことが彼を苦しめてもいた。

それらを知ると、あの炎のようなタッチも理解できたような気になったものだった。

一見、音楽や絵画は言葉とは無縁のような気がするが、むしろお互いに必要で切つても切れない関係にある。

「一枚の絵の前に言葉はいらない。言葉を超えたもの」と聞くことがある。確かに優れた作品を観た時、感動のあまり言葉を失うことがあり、それも正しい。むしろ言葉にならない沈黙によつて、より深く感動が他者に伝わることもある。

以前、ある展覧会で田園風景の絵を観た時の衝撃は忘れられない。それはごくふつうの田舎の田圃がやさしい

色合いと太い線で描かれたものだったが、まさしく、田圃の上を心地よい春風がふきすぎていくような、風の動きを感じた。いや、そう見えたのである。

この感動は、やはり言葉によって表現する。伝えようと思えば懸命に言葉を尽くすしかない。

武田義明著『福岡現在芸術ノート』（花書院）は、まさしく氏の堪能な文章表現力によって、それぞれの芸術（絵画・版画・彫刻等）に大きく貢献している。

氏は、福岡の三十名近い芸術家のひとりひとりに寄り添い、時に生い立ち、影響を与えた故郷での経験、異国での修行等、作品に到るまでの経緯が、氏によって丹念に書かれている。

それぞれの作品が、試行錯誤の繰り返し、血のにじむような努力の賜物だと知るのである。

私のような素人には、氏の言葉によって各作品に息がふきこまれ、僭越ながら作品を観る目が多少なりとも養われるのである。

例えば、今まで素通りしていた天神「アクロス福岡」前の造形「スターゲイト」（菊竹清文氏作）に目をとめ、作者苦心の作であるとしみじみと見入る。

それは、周りの建物にマッチするよう計算し尽くされたものであり、威圧感はなく街中に溶け込むようにある。

中央の円盤の、機械的仕掛けを感じさせない柔らかな風のような動きは、風鈴や笹の葉のゆらぎを好む日本人の感性と合致し、そして何よりも作者の優しさを感じ取るのである。

逆に、絵によって物語が生まれることがある。私の幼児期のことを今も鮮明に覚えている。いろいろな乗物や人がカラフルに描かれた広い絵地図のようなものの中で、次々と言葉が出てきたことがあった。

編物をしていた母が思わずふりむいた映像も頭の隅に残っている。「ようしゃべれるようになった」と思ったと、その時のことを後年話してくれたことがあった。

それは、昨今幼児がおもちゃの車を動かしながら何かぶつぶつ言っている様と同じ類いのものかもしれないが、カラフルな絵から、急にお話が生まれた記憶は今も忘れられない。

大人になってからも、創作は絵によって助けられている。江戸時代に限らず、今現在存在しない当時の人々のくらし、風景風物等は説明文と同じくらい絵の役割は大きい。

当時の絵師の絵画技術によって描かれているが、かな

りリアルに伝わってくる。

藩士が三千人から四千人と連なる大名行列ひとつとつてみても、それぞれ役職名や服装、風呂等の荷物運びまできと細かく描かれている。産婆だけが横切ることのできた大名行列。命を預かる産婆の誇らし気な顔が目にかぶようだ。

闇の中に妖し気な光を放つ吉原遊郭の絵には、遊女の哀しさや苦しみ、儂さが伝わってくるようだ。

貸本の入った箱を担いだ若い男が商家を訪れる絵に、商人とのやりとりの会話が聞こえてくるようだ。

長崎の出島を、その見事な扇形に感銘をうけたのか、多くの絵師がまるでドローンで見下ろしたような絵を描いている。

出島内の生活は、オランダ人が檻のように窮屈だったと証言したにもかかわらず、楽器を演奏したり、玉突きをしたりと、いかにも楽しく暮らしているように描かれている。

暗くよりも明るく描かれている絵の方がテンションが上がり、創作欲がわくものである。

二十代の時、友達の誘いで仕事帰り、絵画教室の夜間部で石膏デッサンと油絵を習ったことがあった。才能な

くとも努力である程度描けるようになることを知ったが、結局何の楽しさも見つけられないで終わった。

唯、講師が言った、「一つの作品ごとにゼロから出発する」の言葉を今でも時々思い出す。

これは小説を書くうえでも同じことで、いくら数こなしても楽にはならない。ゼロからの出発であることに間違いはない。



画・由比貴資